テアトル・コメディイ

岸田國士

青空文庫

先日、仁寿講堂で観たこの新劇団の仕事は、予て聞いてゐた通り、八分賛成でき、二分危険を感じさせるものだ。

賛成ができる点といへば、みな熱心で、素質の優れた人が少くなく、芝居を「面白く」しようと努めてゐることがわかり、翻訳の吟味も相当に行届き、言葉のニュアンスを尊重する風が見え、ファンテジイを愛し、深刻癖に陥らず、上品な朗らかさを楽しんでゐることなどである。

ところで、危険がもう既にそのなかにあるのだ。

第一に、「アメデと靴磨台上の諸君」は、諸君のおやりになるものではない。これは、若い俳優のみが、若い見物に見せる芝居ではないのだ。これは、芝居を「面白く」見せようとするこの劇団の精神に反するので、さういふ点に、賢明な諸君は気づかれてもいい筈だ。諸君が戯曲を読んで直接感じられる「面白さ」と、諸君が舞台の上でみせ得る「面白さ」との間には、まだ時とすると大きな距りがあること、その距りをなるべくはつきりつかんで、無駄をしないといふことは、諸君の演技熟達に欠くべからざる注意である。

第二に、「英語の先生」だが、この脚本を選択した理由は、実際どこにあるかしらぬが、この劇団のレペルトワルからいつて、必ずしも想像できなくはない。元来、この種の喜劇は、仏蘭西でなら、商業劇場の出し物として通用する程度のものだけれど、日本の現状から見れば、これを「新劇」の劇団が上演して一向差支ないと思ふ。つまり、俳優はそこから多くのものを

学び、観客はそこから「新しい」魅力を味ひ得るからである。そればかりではない。日本の劇団は、今まで西洋劇の影響を可なり受けたとはいへ、それは畢竟「文学的」な影響に止り、「舞台的」殊に「演技的」影響は、殆んど受けてゐないのだ。その原因は、かういふ「芝居らしい芝居」の移植が、全然顧みられなかつたせゐと、それを演じてみようといふ俳優がゐなかつたからである。その点、この劇団は、さすがに屈托のない元気さで、この「通俗喜劇」を上演し、しかも立派に「新劇的効果」を挙げ得たことは、私はじめ、大に意を強くする次第だが、さて、これを演じる俳優諸君が、以上の見地から離れ、多少、「いい気になつて」この脚本の調子に曳きずられて行つたら、将来、大事を成すことは覚束ないと思ふ。そして、その心配が全然なくもなかつたことを、私は敢て、直言するのである。（一九三二・三）

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集21」岩波書店
　1990（平成2）年7月9日発行
底本の親本：「現代演劇論」白水社
　1936（昭和11）年11月20日発行
初出：「劇作　第一巻第一号」
　1932（昭和7）年3月1日発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志
2007年11月20日作成
2016年5月12日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

テアトル・コメディイ

岸田國士

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/